

# 「教科外体育」を 考える

今回のお話は読者のみなさんにもなじみのある「部活」。この部活、いったい何のためにあるのでしょうか。宮城教育大学の神谷拓先生に部活動を始めた「教科外体育」について伺いました。



宮城教育大学

## 神谷 拓 先生

教育学部保健体育講座准教授。専攻は体育科教育学、スポーツ教育学。2011年より宮城教育大学にて教鞭を執る。主に体育授業と体育行事、運動部活動、地域スポーツクラブを関連づけて指導する原理や方法、運動部活動を学校教育に位置づけるための教育論、体育行事を自治集団活動として指導するための方法を研究中。

## 変化した始めた運動部活動

—神谷先生のご専門は「体育」とのこと。具体的にどんな研究をなさっているのでしょうか。

わかりやすく言いますと体育授業の研究です。どのようにすれば子どもたちが喜ぶ体育授業ができるのか、というのですが、私の場合は運動部活動や体育行事についても研究中です。むしろ、そちらの方がメイン。

具体的には「体育の授業でこういうことを教えたら運動部活動に活かされるのではないか」「体育行事でこういうことをやったら子どもの生活にスポーツが根付くのではないか」といった内容です。これらは授業以外の体育ですから「教科外体育」が私の研究の中心になっていますね。

—珍しい研究テーマなのではないですか。

おそらく運動部活動がメインテーマの研究者は日本で数えるほど。メジャーかマイナーかと言えばマイナーです(笑)。

運動部活動の発生は古く、戦前にさかのぼります。その長い歴史の中で、運動部活動が学校の教育活動として認められていない時期が過去に2度ありました。学校の教育活動は学習指導要領に基づいて行われていますが、70年代と2000年代、部活動について触れられていなかったのです。もしかすると、再びそういう時代が訪れるかもしれ

ない。

しかし、さまざまな問題が起こった場合はどうでしょうか。学術的な視点でコメントできる人がいなければいけませんよね。そういう意味で私の研究は役に立っているのかなと思っています(笑)。

—運動部活動を取り巻く環境に変化は見られますか。

東京のある学校で、週末の部活動の指導者を民間のコーチに委託するという試みが行われています。

授業を民間の先生に委託するとなったら大騒ぎですが、部活動の場合はそうではないんですね。

学校の先生は本当に忙しい。その中で部活動も指導しなければならない。しかも何か問題が起きたら責任は顧問の先生です。それならば民間に一任して忙しい先生の代わりに専門家が指導すればいい。先生も助かりますし、先生の都合に合わせなくて済むので、子どもたちのためにもなりますよね。ですからこの取り組みは今後全国に波及するかもしれません。

ただ、実際にはどうでしょうか。部活動を外部に委託する場合、少なからず料金がかかるわけですから、お金を負担できない子どもは部活動に参加できなくなる可能性が

出てきます。さらに被災地でそのような事態になってしまったら…。本来、学校の教育活動は原則無償でなければなりません。

では、なぜこのような状況になったのか。それは学校で運動部活動をやる意義や意味を見つけれずにいるからです。議論すら起こらない。「ならば地域クラブでやればいいのでは」となりますが、中体連や高体連など学校として参加する以上そうはいきません。

このような状況を変えていくために、私は現在「学校に部活動は必要」というスタンスのもと、運動部活動の位置づけについて考えています。

「部活動って学校でやるのが当たり前」とみなさんお考えでしょう。学校で好きな活動に部活動をあげる子どもたちも多い。でも理詰めを考えていくと位置づけることが難しいのです。先生も悩んでいますし、研究も追い付いていません。本当に難しいテーマです。

## 子どもたちが 企画運営する体育行事

—神谷先生の研究テーマに体育行事とありますが、運動会なども変化していますか。

学校行事における先生方の指導時間がかなり減ってきています。

私は一昨年と昨年、東松島市立鳴瀬第二中学校の運動会運営に関わりましたが、実際に子どもたちの全体準備にあてることができたのは一昨年在5日、昨年はたったの4日間です。また、この運動会は地域の方々も一緒に取り組むものだから、そのコーディネートもしなければならない。校舎を間借りしてい

るという理由もありますが、スケジュールがとてタイトです。

本来、運動会や部活動という教科外活動は、子どもたち自身が企画・運営するのが前提になっています。しかし子どもたちがゼロから始めるとなると、どうしても時間がかかるし、先生の細やかな指導も必要。ですが、体育行事にあてることができる時間は、年々減少していますから、どうしても学習発表会のような運動会にならざるを得ません。

鳴瀬二中の運動会では、時間のない中でも子どもたちに自主的に取り組んでもらおうとチャレンジしました。子どもたちがテーマを決め、そのテーマに沿ってどういう運動会がふさわしいのか考えていました。

—昨年は復興がテーマ。復興のイメージは火だ、聖火リレーをやろうと、自分たちで火を起こして聖火をつくり、地域の方々へつなぎ、最後に生徒会長に渡りました。また、この地域

には乗馬クラブがありましたが、津波から生き延びた1頭の馬に実行委員長が乗って登場しました。残念ながら鳴瀬二中は統廃合が決まっていますから、昨年は最後にふさわしい内容

にしようとして子どもたちが想いをのせて風船を飛ばしました。運動会で地域のみなさんが泣いている光景を初めて見ましたね。

こういう行事をどうやったら実現できるのか。鳴瀬二中の事例をトランスレート、翻訳している状況です。

—運動会が嫌いな子どもが多いですが、それなら楽しめそうですね。

運動会嫌いの大きな要因は、やはり「何で行進なんかしなくちゃならないんだ」「何の意



味があるんだ」という「やらされている感”です。子どもたちには何のために運動会をするのか、運動会で何をやりたいのか意味を与えなければなりません。意味を知り、そこから「よし!やってみよう」となるんですね。

運動会は学校教育でありながら地域の行事でもある特殊な領域です。だからダイナミックな企画だってできる。自分たちで企画運営し、それがうまくいった時、子どもたちに与える衝撃はすごいと思います。

今、子どもたちは外に出て体を動かす機会が少なくなってきました。運動の楽しさ、気持ちよさを知る、そのきっかけが運動会のような体育行事であるべきだと私は考えます。

もちろん外で体を動かすことも大事ですが、前述の通り、子どもたちには自分たちで決める、自分たちでやってみるという力を習得してほしい。「スポーツやりたいけど、部活はちょっとな…」「入部してやめたら「根性ナシ」って言われちゃうし」という子に、自分で新しい部活を作れるようになってほしいのです。ただ現状では事例が少なく難しい。ですから実現に向けて私の研究室で調査を進めているところです。

私は部活動や体育行事といった教科外体育は「スポーツ振興の核」だと考えています。子どもたち自身が考え、その経験を小・中学校、高校、大学へつなげ、やがて地域へ広げる。そのための部活であり体育行事だと。ですから必ず教科外体育は必要だと思いますね。

